

故阿仏房讚歎御書

弘安二年三月以降 五八歳

方便現涅槃^に而実不滅度ととかれて、八月十五夜の満月の雲にかくれてをはするがごとく、
いまだ滅し給はず候なれば、人こそ雲にへだてられてみまいらせず候とも、月は仏眼・
仏耳をもつてきこしめし御ら^むあらむ。其上故阿仏房は一心想見仏の者なり。あに臨
終の時釈迦仏を見まいらせ^候はざ^らむ。其上